立川市は「男女平等参画基本条例」を制定しています
（全文は立川市ホームページhttp://www.city.tachikawa.lg.jpからサイト内検索で）

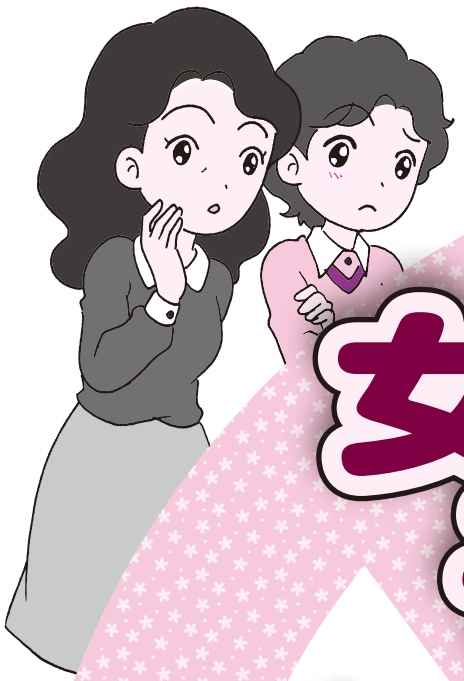
新しい生活文化を発信する

アイム

主な記事
2〜3面　女性の経験を政策に！／第4回たちかわ男女平等フォーラム
4面　立川・このグループ／第10回くらしフェスタ立川／アイム・インフォメーション

3/25 NO.29
2012（平成24）年
年2回（9月・3月）発行

発行／立川市女性総合センター
（生活安全課・男女平等参画課）
企画・編集／市民編集委員
（〒190-0012）立川市曙町2-36-2
☎042-528-6801　FAX042-528-6805
e-mail　seikatsuanzen@city.tachikawa.lg.jp
danjobyoudou@city.tachikawa.lg.jp



楽しい話で盛り上がる「女子会」
介護のことや子育てのこと、この頃は放射能汚染のこと…
話題はつきませんよネ。
これらのことを議会で解決しようと思ったことがありますか？
そんな話を女性たちの集まりで出せますか？　今回のアイムは
女性たちの政治参加について特集してみました。

女子会で政治の話は

若いアイム編集委員のつぶやき

私はいま25才ですが、過去に選挙に2回しか行ったことがありません。前回の都知事選では、「何か新しいことをやってくれるかも」と思った候補に、政策もろくに見ずに投票しました。

私の場合は、最近、長男を出産し家計を守るようになって、政治に無関心であってはいけないなという思いがめばえてきました。子ども手当や、働こうと思った時のワーキングマザーへの支援など、政治が影響している部分に自分も関わりが出てきたからです。

とはいえ、同じように子どもを持つママとのママ会でも、放射能汚染や子ども手当のことなども話題に上りますが、政治の話には一切なりません。

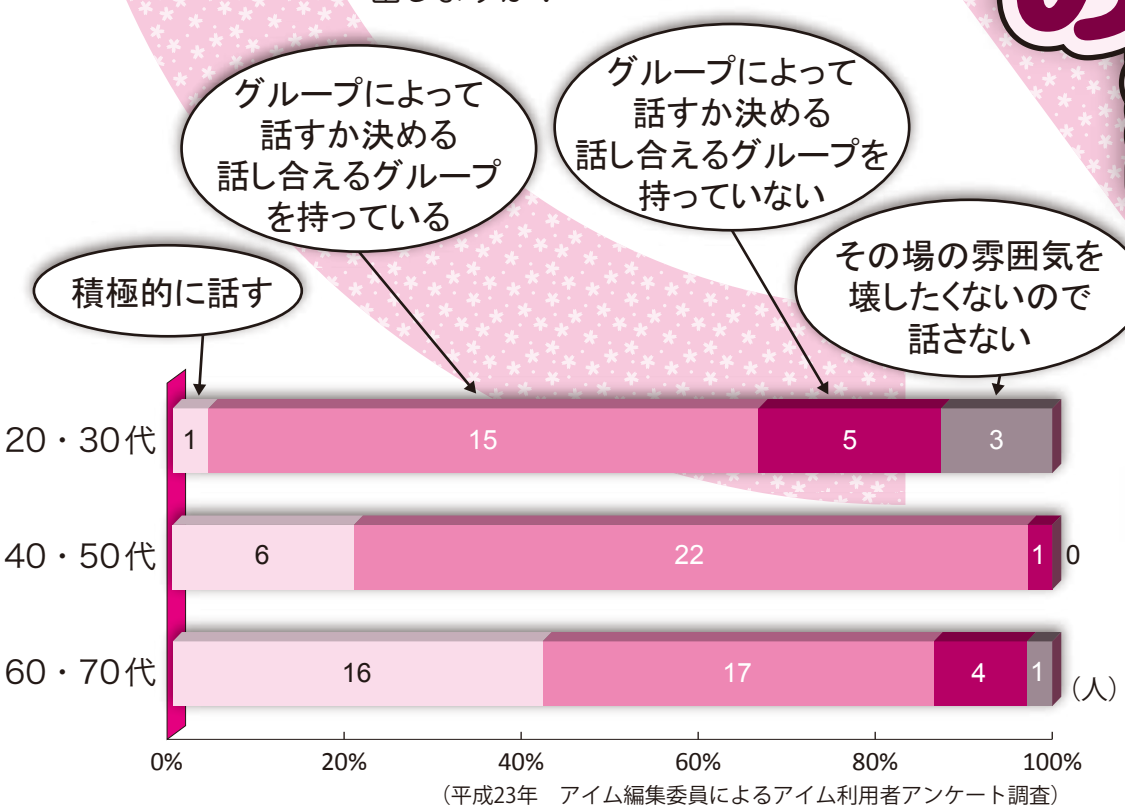
この分野で困った時、たいていインターネットで検索して、自分で解決してしまうので、政治に頼ろうと思いません。政治は政治家が私達の手の届かないところで行うもの、参加しても無駄という気持ちがあります。また政治には汚いお金やしつこい選挙運動などよくないイメージもあります。

それに主婦が見る時間帯のテレビも芸能ニュースや視聴率狙いのニュースが多く、ママ会の話題もこのようなもので、政治の話をしたら「まじめ」と敬遠されるのではと思ってしまいます。

政治は変えられないという意識があるから、女性たちは政治に興味がないフリをしているのかもしれませんが…。

立川の女性たちにアンケート

設問「介護で困った」「公園の放射能が気になる」「給食を地元の野菜にしてほしい」など個人では解決できない問題や要望が出てきたとき、あなたは友人との集まりで、その話を出しますか？



（平成23年　アイム編集委員によるアイム利用者アンケート調査）

いずれの年代でも「グループによっては話す・話し合えるグループを持っている」と答えた人が多い結果となりました。しかし20・30代では「グループによって話すか決める・話し合えるグループは持っていない」、「その場の雰囲気を壊したくないので話さない」人の割合が、60・70代は「積極的に話す」人の割合がそれぞれ高くなっています。

政治の話だって大切なことは話題にする中高年世代、グループを選んで活発に話している働き盛り世代、政治の話は敬遠気味の若い世代と見ることができるかもしれません。

女性の経験を政策に！

新潟県津南町で大学院在籍中の女性町議が誕生したり、大津市で女性最年少の市長が当選したりと、若い女性の政治への挑戦が目立つようになりました。しかし日本全体でみると、政治の世界はまだまだ男性優位。あらためて女性議員の割合を世界的に見てみると、衆議院が世界187カ国中122位、参議院は73カ国中35位という低さです。（3ページ円グラフ参照）より男女のバランスがとれた議会にするために、女性議員を増やす活動を続けている三井マリ子さんは、女性の政治参加先進国ノルウェーの紹介もしています。三井さんにお話をお聞きしてみました。

介護・子育て、待ったなしの日本、その当事者は女性

―日本の女性議員の割合は衆議院で10・9％、参議院で18・6％、都道府県議会で8・1％、一番多い市町村議会でも14・6％。本当に少ない。

【三井】高齢化社会の今、日本人口の半分以上は女性です。ですから政治の場にも女性が半分いて当たり前です。現実は一割ちょっと。これではバランスが取れた政治は望めませんね。

―バランスが取れた政治とは？

【三井】歴史的に、生活や暮らしの場を支えてきたのは女性ですね。男性の多くは家の中のことを誰かに任せて、外に働きに出ていました。日々の食べ物から介護や家事育児、そしてゴミ処理まで、身につまされて考えてきたのは女性です。そうした経験から蓄積された知恵や判断が女性にはあります。しかし女性が政治の場に参加していなければ、こうした知恵が政策に生かされることはありません。どぶに捨てられる…。

昨年12月、朝日新聞の調査で、原発反対は女65％、男49％でした。命や子どもに向き合うことの多い女性が原発に懐疑的なのは当然です。こうした女性の声にフタをして男性の声だけを尊重するとどうなるか。偏った判断・決定がなされる可能性が高い。それは危険です。国や自治体にとって大損失です。

―女性の声がそれほど大切とは思いませんでした。

【三井】少子高齢化の問題、ゴミ問題、母子家庭の貧困などいずれも、いま最も緊急性の高い社会問題ですよね。ところが、国会でも地方議会でも優先度の高い政治課題にされてはいません。

―なるほど。でも肝心の女性議員は少ない。

【三井】そうです。政治や企業の意思決定の場に女性が圧倒的に少ないのは、社会における男女の力関係の差がストレートに反映されているからです。

政財界だけではありません。家庭内暴力（DV）や職場の男女差別、セクシュアルハラスメントなど、数々の女性への人権侵害を産んでいます。

―というと、たとえば？

【三井】DVは、夫や恋人など身近な人から受ける暴力です。加害者は誰にでも暴行を加えるわけではありません。「この女にはこれ位やっても許される」とたかをくくって殴るのです。そこには、「妻は夫の言うことをきくもんだ」、「妻なんだからこの位我慢しなくては」という双方の考えが横たわっています。つまりDV犯行の底には男女のパワーバランスがあるのです。

そうしたいわば隠れた社会問題を、女性たちは長年の運動の中で「見えるもの」にしてきました。そして、少しずつ政治の場に出て、法律や制度をつくってきました。

―二〇〇一年のDV防止法が一例ですね。

【三井】そうです。女性たちが政治の場に出ることで、女性への人権侵害を防ぐ政策がつくられる。女性がハッピーな社会は子どもたちの幸せにつながってゆくのです。

女性市長、女性党首、女性大臣が当たり前のノルウェー

―ノルウェーでは、国会議員ばかりではなく、大臣も約半数が女性だそうですね。

【三井】はい。地方議会も県会議員の45％、市議会議員の38％が女性です。

地方議会議員選挙が昨年秋にありました。女性議員や女性市長の割合が前回から増えず、さらに有効な手がないか検討されています。

―日本から見ると、にわかには信じられない話ですが。

【三井】北欧諸国はどの国も女性の政治参加が進んでおり、ノルウェーはその先駆けとなった国です。

しかし、意外なことに70年代までは、ノルウェーも日本と同等かそれ以上に男尊女卑の国だったのです。それが劇的に変化したのは、73年に民主社会党が選挙候補者リストに世界で最初に「クオータ制」を導入して以後のことです。

―「クオータ制」というのは？

【三井】「クオータ」はもともと割り当てるという意味です。「クオータ制」は国民の構成を反映した意思決定ができるよう、議会や委員会などの人数を、異なった構成に応じて割り当てる制度です。それを民主社会党の初代党首ベリット・オースは男女の格差是正のために導入しました。

彼女は党首を引き受けるかわりに、党の選挙候補者のリストを男女交互にすることを実行させたのです。後、それにならう党が増え、女性議員が急増しました。

―制度さえ変われば、女性議員を増やすのは容易なのかも。

【三井】86年には、ノルウェー初の女性首相グロ・ハーレム・ブルントラントが、閣僚の4割以上が女性という内閣を誕生させて、世界中の女性たちを大いに勇気づけました。

―「クオータ制」の威力大！

【三井】ノルウェーの男女平等法には「4人以上からなるすべての公的審議会、委員会、評議会などは、任命、選挙を問わず、一方の性が40％を下回ってはならない」と明記されています。ノルウェーが選考するノーベル平和賞も選考委員の6割が女性です。昨年はリベリアの女性大統領ら女性3人が受賞しました。男性選考委員ばかりだったら、違っていたでしょう。

08年からは、会社にも「クオータ制」が導入され、「取締役会の40％以上を女性に」と義務づけられました。人材がいないと反対していた企業も法律ができると、優秀な女性の確保に走りだしましたね。

渦中にいる女性こそ、議員になって問題を伝えよう

―ノルウェーの女性たちの活躍には励まされます。一方、今の日本では政治の話は出しにくいと感じている人も多い。

【三井】このままでは政治的な力のある女性は日本を脱出します。世界はそういう女性を大歓迎ですから（笑）。

日本のマスコミがその役割を果たしていないこともあります。政治の光が当たらない部分を丁寧に伝えていないので、問題点が見えにくい。

また長時間労働、遠距離通勤が、政治的活動に使える私的な時間を奪っていることもありますね。

―というと？

【三井】北欧の人たちは職業、趣味、睡眠、生活、政治に誰もが等しく時間を与えられていなければならないと考えています。「政治」があることに注目してください。誰もが気軽に政治的活動をする――それは生活に欠かせない、と考えているのです。ですから男性でも、労働時間は日本人より少ないけれど、家事育児をしたり、夜は組合や政党の活動でけっこう多忙です。

そうした政治的な活動をしながら、町のことを考えたり、子どもたちの将来のことを話し合っているわけです。彼・彼女らはそれを大人たちの責任と考えて行っています。

ところが、日本は政治の話をする暇もないありさまです。

―そうした現状を変えるためにも、女性議員を増やしたい。

【三井】そのとおりです。子育てで大変な女性、職場で辛い思いの女性、少ない年金で不安な女性、セクハラ被害者、そういう渦中にある女性たちが、「大変だから政治家に出れない」ではなく、「大変だからこそ出る」という選択をしてほしいです。私の後ろには、声を上げたい人が何万人もいるという気概を持って、女性たちが政治の場に参加することがとても重要です。政党もそういう女性を引きあげてほしいですね。

ノルウェーでの体験ですが、音楽会の後で4人の女性たちとお茶をしたら、3人が選挙に出た経験がある人でした。日本でもそうなれば、女子会も政治の話で盛り上りますよ。

女性候補者がいない掲示板を変えなくちゃ

―女性議員の実状を教えて下さい。ちなみに立川の女性議員の割合は20％を超えています。

【三井】地方へ行くと、女性の議員はゼロという町村がたくさんあります。2千～3千ある自治体の1／4が女性議員ゼロです。

前回の統一地方選挙の折、熱海市で立候補している人たちのポスター選挙掲示板を見たのですが、女性はたった一枚。全国を見渡すと、一枚どころか全員男性という掲示板も多いのです。

―女性に入れたくても、候補者がいなければ、無理ですね。

【三井】男性ばかりの選挙用掲示板を見たら、女性が「徹底的に排除されている」と怒りをもって（笑）見ましょう。

民主主義はまず、地元の自治体が住民の声を吸い上げて意思決定し、必要なら県に届け、国に上げていくというプロセスを取りますが、その場に女性が存在しないと、人口の半分である女性の声は届きません。これを「民主主義の赤字」とヨーロッパでは呼んでいます。日本は大赤字です。

―それでも、女性たちは立候補なんて思いもしない？

【三井】赤字は解消しなくてはなりません。日本では男性の独占期間があまりに長すぎて、女性が議員になるイメージを持てないのです。

私は、全国フェミニスト議員連盟というグループで女性議員を増やす活動をしています。「女性ゼロ議会」に、女性議員を一人誕生させるのは至難の業です。その土地に行って、日ごろの苦労話をしたり、女性議員の多い国の勉強会をしたりしながら、やはり女性議員がいないと…という気持をみんなが持ち、やっと1人が立候補を決意してくれます。

優秀な女性たちがいっぱいいるのに、埋もれてしまっています。悔しいですね。

もうひとつ指摘したいのは、候補者を決める仕組みに、女性が排除される場合が多いことです。

たとえば集落に分かれている市町村があります。その集落には「寄り合い」という場があり、そこで候補者が決まるのです。寄り合いに出られるのは「主人、息子」だけ。まず「寄り合い」に女性が一人の人間として出られるようにならなくては。それを突破しないと女性は絶対に候補者になれません。

―村の慣行、恐るべしですね。

三井マリ子さん

高校教員を経て、都議会議員２期。大阪府豊中市とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ初代館長（2004年３月まで）、武生市初代男女平等オンブッドを歴任。お茶の水女子大学、米コロンビア大学修士修了。女性政策研究家。ノルウェーの男女平等政策に関する著作多数。最新刊『ノルウェーを変えた髭のノラ―男女平等社会はこうしてできた―』（明石書店）

第4回 たちかわ男女平等フォーラムを開催します。

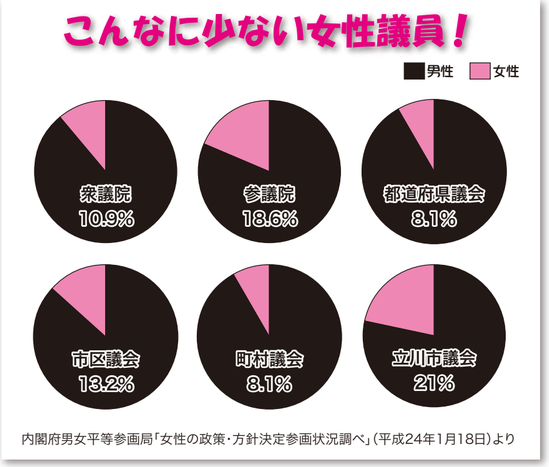
テーマ

女資力・男資力
～力をあわせてしなやかに前へ～

期間　平成24年6月18日（月）～6月24日（日）
（休館日6月21日を除く）

第4回たちかわ男女平等フォーラム実行委員会と共催し、講演会や展示などさまざまな事業を行います。（いずれも、休館日の6月21日を除く）

詳しくは、広報たちかわ5月10日号に掲載の予定です。



内閣府男女平等参画局「女性の政策・方針決定参画状況調べ」（平成24年1月18日）より

この印刷物は再生紙を使用しています

立川・この人（ひと）（グループ）
DV体験者が被害者の心を支える

DV体験者が被害者の支援をする
ウィメンズライツ（女性の権利）センター

両脇に弁護士と支援者が座って私を支えてくれたのが頼りでした。だから付き添い支援は私自身が、どうしてもやりたい活動でした。

もうひとつは、サポートグループ（体験者同士の自助グループ）の運営です。サポートグループは各地域で勉強会や話し合いの活動をしています。立川では「親子のつどい」を定期的に開いています。

「親子のつどい」にしたのは、日常的に暴力が振るわれる家庭で育った子どもたちの心のケアができたらと考えたからです。DV家庭の子ども達は精神的にも深く痛手を負っています。その心を癒しながら、自尊心や信頼感を取り戻してもらい、将来、その子が加害者になるようなことがないようにしたいのです。

また、被害者は新しい地で生活を始めるため、地域では孤立しがちです。「親子の集い」は被害者親子が横のつながりを広げる場でもあります。

●なぜ夫から逃げられない？

被害女性は、夫の暴力を避けて、その日その日をいかに無事に生き延びるかに集中しています。身体的暴力、言葉や態度による揺さぶりで、被害者の精神状態は抑うつ状態にあります。感情も鈍く、合理的判断ができないのです。

また夫もいつも暴力的ではなく、優しい時もあります。

被害者に気づいたら、声をかけて

離婚したら子どもを取られるのではとか、仕返しが怖い、経済的な不安などさまざまな不安が渦巻いて、結局、逃げるより、被害者は我慢するしかなくなります。

●DV被害は多いのですか？

平成21年の内閣府の調査では、DV経験のある女性が約3割にのぼり、そのうち1割が「命の危険を感じたことがある」と答えています。

加害男性も大学教授・教師・医師・国会議員など知的職業の人の中にもいます。被害女性も主婦ばかりでなく大学教授をはじめ、職業を持った女性にもいます。自分の家庭はDV被害とは無関係ではあっても、子ども達が被害に遭わない保証はありません。

加害男性は公的な場では外面がいい人が多く、周囲も家庭での変身を見抜けません。

●私たちができる支援は？

DVは犯罪であり人権侵害です。そうした被害に苦しんでいる女性がいたら、話を聞く、相談窓口を紹介する、私たちにつなぐなど、さりげない支援をお願いしたいです。

私も着の身着のままで、シェルターからアパートに移る時、衣類を持たせてくれた友人がいました。専門家でないからと躊躇せず、できる事で手を差し伸べてほしいです。

●支援活動のきっかけは？

平成14年、アメリカ在住の加藤洋子さんが自らの家庭内暴力の体験を、日本で講演してくれたことがきっかけです。その講演会の後で、私たち体験者と婦人相談員数人で、夫や恋人の暴力に苦しんでいる人たちを支援していこうと立ち上げました。

●どういった活動を？

ひとつは被害者の支援です。公開している携帯電話（090-5763-2490）で、相談を受け付けて、さまざまな場に付き添います。

被害者は事件を訴えるにしても、離婚調停や公的相談であっても、警察や裁判所、市役所など普段出入りしない場に出向かなければなりません。日々の緊張で身も心もくたくたになっている被害者には、それがどれほどの重荷か体験者の私にはよくわかります

実は私も夫と裁判所の調停で対決しなくてはならない時、恐ろしさで身体が震えました。

アイムインフォメーション

お問い合わせは、女性総合センターへ
☎042－528－6801

男女平等参画課
平成24年度市民参加事業（予定）

男女平等参画社会を実現するため、フォーラムや講座、広報紙など、さまざまな事業を予定しています。
くわしくは、「広報たちかわ」・ホームページか女性総合センターへ。

第1回立川市ワーク・ライフ・バランス事業所認定式
平成24年6月22日（金）

市ではワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）推進に積極的に取組む市内の事業所を認定する、ワーク・ライフ・バランス推進事業所認定事業をスタートします。

・認定式
・第1回立川市ワーク・ライフ・バランス推進セミナー

★ワーク・ライフ・バランス推進事業所募集中
〆切　平成24年3月30日（金）

市民企画活動事業（募集）

男女平等参画の実現に向けた講座やワークショップなどを、主に市民で構成する5人以上の団体、グループに企画・運営していただく予定です。

情報紙「アイム」（編集委員募集）

市内全戸に配布している女性総合センターの情報紙で、市内在住・在勤・在学の編集委員が紙面の企画・取材・執筆などを行っています。

お知らせ

アイム「ギャラリー」、「第2会議室」は窓口サービスセンター仮移設準備のため、平成24年7月から当分の間、貸し出しを中止します。

情報紙「アイム（№29）」の企画・編集
〔市民編集委員〕鈴木洋子／武江俊江
百戸智美／他1名
〔助　言　者〕原　和美
〔カ　ッ　ト〕玉井公子　〔敬称略〕

『第10回くらしフェスタ立川』開催！

平成24年2月18，19日の両日、女性センターアイムで「第10回くらしフェスタ立川」を開催しました。市内14の消費者団体と立川市の協働事業で、今回のテーマは「未来のために今こそくらしの見直しを」でした。平成23年3月11日には東日本大震災や原発事故があり、10回目の節目でもあることから、平成23年5月の第1回目実行委員会からテーマに沿って様々な話し合いを重ねてきました。

記念の講演会は江戸時代‘百万都市江戸が世界に冠たる環境都市’であったことが、現在の私たちが学べるものがあるのではと「花のお江戸はリサイクル先進都市～くらしのヒントがここにある？」に決まりました。講師はいわき出身の前進座俳優・横澤寛美さん。福島県いわき市出身ということもあり、被災地への思いも込めて衣食住にわたる江戸庶民のくらしぶりが語られました。ホールには男性の姿も多く見受けられ、活発な質問に会場は大変盛り上がりました。

1階のギャラリーは展示コーナー。防災や食の安全、環境をテーマにしたパネルがならび、健康チェックや子育て相談なども設けられ、どのブースも熱心に質問する来場者の姿がありました。

5階は主にイベントコーナー。お茶席や着付け教室、昔あそびや手話教室など楽しめる企画が目白押し。恒例の手作りカレーは全て立川産の野菜を使い、地産地消をアピールしました。カレーとならんで、無農薬のコーヒー、紅茶を提供する喫茶コーナーは「くらしフェスタ」の目玉です。特別企画「市職員が撮った東日本大震災の写真展」は被災地にゆかりのある人が訪れて話し込むなど、思わぬ交流の場となりました。

このほか、映画やコンサート、出前寄席などアイム全館どこを覗いても何かしら催しのある2日間は高齢者から子ども連れの家族まで多くの市民で賑わいました。会場はバルーンアートで埋めつくされ、地味なテーマに華やかさを添えていました。くらしをテーマにしたポスター展には市内の小学校や子ども会から155点の応募があり、「くらしフェスタ」は子どもから大人まで広く市民に消費生活を啓発する場になりました。